橘曙覧と堀名銀山

笠松一夫

曙覧の「志濃夫廼歌集」に見える

日のひかりいたらぬ山の洞のうちに
火ともし入てかね堀出す

以下八首の鉱山労働の歌については、曙覧の紹介者子規が特に激賞したに始まり、その取材範囲の広さ、精細な描写、連作体の表現様式に、多くの歌壇人、識者たちを味到させ、賛辞の的となつてきたが、この歌の対象となつた鉱山は、勝山市荒土町の堀名銀山で（子規、御風など飛騨の国と誤つているが）今は廃坑、もう久しくなる。

曙覧が、はるばるこの銀山に出向いたのは、当時幕吏として、この銀山開発に当つていた飛騨高山の旧友、富田礼彦を訪れたもので、はし書きにもしるされ、問題の八首の外、礼彦へよせた十首の詠草があり、如何に感興の深かつたかがしのばれる。

富田礼彦は、国学を田中大秀に、漢学を赤田章斎に学び、著書に、十八社考、斐太後風土記、三郡沿革などの郷土誌をはじめ、詩歌集、随筆と三十余種があり、曙覧との交遊は同門（曙覧が穴馬の険を冒して、師の門をたたいたのは三十三歳の時、弘化四年―一八四七）、詩文の友として堅く結ばれたもの、年も曙覧とは一年長、その情誼のこまやかさは、歌集中この堀名行十首に尽きるといえよう。

この外、歌集中には、なくした娘のとぶらいと、五十賀によせた二首があり、また同門飛騨の山崎弘泰の死去を、礼彦が報じているのが見え、残された書簡は少いが、終生（礼彦の歿年は、明治十年―一八七七―五月三日、六十七歳、曙覧より九年後）消息がかわされた。曙覧の知己朋友のうち、郷外のただ一人として、礼彦とのこの親交は、曙覧伝記の一章に欠かしてはならないものとなつている。

礼彦は幕領飛騨高山（元禄五年以前は金森藩）の郡代所に出仕して、地役人頭取となり、度々郡代に建言しては、道路の開発改修、備荒倉の設置など領内民福のために献身するところが多かつた。当時同じ公料地であつた越前堀名村（ほりみょう―堀明とも書く）の鉱山を、御用銀山として開発することになつたのも、礼彦の進言であり自らその掌に当つたものと見られる。

堀名銀山の発見は、嘉永年間のこと、村名主島田弥兵衛の手によつて試堀を見ていた。命をおびて礼彦が、高山を出発したのは安政六年―一八五九―十月、穴馬道を下つて堀名に着任した。古老間のいゝ伝えによると、この時、入山のお上の一行は、日の丸に「御用」の立札も物々しく、三頭の荷駄の千両箱には、村を挙げての出迎えども眼を見張つたという。名主格島田弥三郎方（試堀の弥兵衛方）にくつぬぎし、程なく石倉惣右衛門方を当座の宿にあてたが、上役も昼は手弁当にて、営々鉱事を督励したもの、採堀した鉱石は、同家の二間に五間建ての長い土蔵を借受けて置場としたが、その重さに床板も落ちる始末、飯場の要米一日四俵、女手の立回りも忙しく、千石どおしを漏れた小米の類は、惜し気もなく振舞うなど、公儀の労役に使料に村はにわかにうるおい活気づいたという。

礼彦の堀名在職は半年余と見られ、この間の消息は、「越路の日記」一巻となつて残された。着任間もない同年十二月一日、礼彦は本保代官所への挨拶を兼ね、曙覧訪問を楽しみに府中に向つた。日記には、

晩雪ふる、堀名銀山を立出で、小舟渡といへる舟渡しにて、夜ははのぼのと明けぬ。山王、古市などいう里うち過ぎて――

と、見える。曙覧を訪れたのは、本保からの帰途、白髪も眼立つて老いた二人の学友は、久々に旧情を温め、旅宿での一夜の歓も尽された。

翌万延元年―一八六〇、曙覧四十九歳の春、堀名の礼彦に書面を送つた。――その御あたりは奥ふかき山里に侍れば、去年よりふかき雪のうちにうもれ給へる。うぐひすの声なかりせば、といふらんやうに物さびしさ――（藁屋文集）辺地にある礼彦の身をいたわり、是非一度訪ねたいと書きそえたが、勝山街道の雪解けとともに、その念願を果した。

堀名銀山の鉱区は、水無山（七八四・四メートル）のふもと、旧勝山道にはさまれた狭長な地域三百坪ばかり、間府（まぶ―鉱坑）に近い石垣積みの台地に建てた役宅を、里人は御殿と呼んだが、礼彦は小屋といい、小屋に小作りな庭も造つた、三月四日のことで、それから間もない日、曙覧をここに迎え入れた。

手打ち蕎麦のもてなしに、主客膝を交えて話ははずみ、一日は山の案内もうけ、和やかな浅春の幾日かを過した曙覧は、途中小舟渡まで見送つた礼彦に、別れの歌三首を詠んで無事を祈り、九頭竜の川風寒い船渡しを越えた。そして、またいつの日か再会を待つたが、遂にその機はなく、これが最後の対面となつた。

礼彦堀名在住中の詠と見られる短冊一葉がある。〃藤ばしを心して渡れと人のいいければ〃と題して、

藤なみのなみにやおもひ渡るべきこ
や紫の雲のかけはし

（藤橋は、単なる藤づるのつり橋、美濃の旧名勝に藤の懸橋があるが）その清雅な道風流の書体は、幽放は曙覧の書とは全く対照のもの、謹直で温厚な人柄がうかがわれる。居間のふすまを町（小笠原藩勝山城下か）から運ぶ途中、出会い頭に荷牛が暴れて傷ついたが、役夫どもにはとがめることもなく、その上に自作の画や歌の紙切れをつぎ張りした話には、〃神習おほやけ心〃上司の器といたく感嘆した曙覧である。神習う道にはつながつた二人であつた。

堀名銀山大規模の採拡は、公儀開発の後をうけて、飛騨の鉱山師伊藤文七の手に移つてからといい、当時同山系に続く隣村細野口銀山とともに、その全盛時代であり、遊女街もあつたと伝えている。従業の鉱夫百余人、砕鉱臼三十余、日産銀四貫目内外を出したという外、記録などの手がゝりはない。明治の初年頃より衰え始め、鉱主も三菱系など幾人かの手を経て命脈を保つたが、貧鉱は引合わず、資金も続かず、明治三十年頃廃止となつた。

曙覧が、採堀・砕石・選鉱・溶鉱・運搬と、一貫の鉱山作業場景を写した当時の跡は、今は日吉神社の境内となり、間府も落ちた三つばかりの坑口を山腹にとどめている。日吉神社（祭神大山咋命）は、元近くの水田地籍から鉱区の一角に遷座し、鉱山守護神としたもの、万延元年といい、礼彦離任の前後に当る。拝殿に掲げる絵馬に、「奉納、文久二年秋、斐太冨田銀之進」のものがある。銀之進は礼彦の孫、曙覧の堀名来訪の時、礼彦はこの孫を得た喜びに、祝の歌を所望したが、その一年後の寄進で、銀之進は三歳、馬の絵と奉納の二文字は祖父礼彦の手の跡と見られる。御殿跡の台地は、今は民家の屋敷となり、竹林おい

茂るところ庭の面影がある。

この旧銀山鉱区の西、日吉神社境内に続く、通称「だんがはな」の岸壁の山上は、朝倉始末記に見る一揆の雄将、島田将監正房のよつた「壇ケ城」の跡、背後に県境一帯の山々を負い、勝山全盆地を展望する自然の要害地となつている。築城は正保、景良を経て正房は三代、元亀天正の合戦に度々戦功を重ねたが、遂に囲まれて落城、加賀江沼郡波佐谷に逃れた。その後八年、子の正良は故郷を慕つて、この城に近い森川村に移住し、先に恩賞として本願寺から賜わつた、祖師の御影などを守つて、近郷五十三箇村の総道場に取立てられ、「倶会精舎」の一寺を建立し、島田忠右衛門（現在は廃家、寺舎だけを荒土町別所に移る）の祖となつた。

さて、曙覧はよくこの寺をたずね、好きな蕎麦を喜んだ話が残り、寺には曙覧の書の所蔵も多かつたといい伝えているのは、何の縁由によつたのか。島田の家譜は、曙覧と同じく橘の名門（代々、妻は朝倉家、和田本堂寺、三国道実家など高家の娘）で、一脈のつながりは見られる。先の富田礼彦の短冊が、同家を出所とするとも伝えるなどから、曙覧、礼彦、島田と、たがいに往来のあつたことも考えられ、壇城の旧跡に感懐を共にしたともいえようか。

大正十年頃、福井の曙覧研究家仙石亮博士、郷土史家山下与平、同好森紫南　蟹本末辰等一行が、史跡をたずねて堀名に来山、博士による臨地講演もあり、

ものの ふのふりにしあとを問いくれ
ばあとかたもなくくつわ虫鳴く

の一首を手向け、奇特にも不動像を安置して、その霊をとむらつた。森紫南の「大南越」誌に発表した「曙覧と礼彦」の一文は、この時の見聞をまつてまとめたものと思われる。

〔附記〕　礼彦の曽孫、稔彦氏（道彦―豊彦を経て高山市に現住、令禾と号し日本画家）からの親書によれば、同家に伝わる曙覧のものとして、銀山八首の一軸が珍蔵とされ、その他には書簡一通、短冊五葉ほどが見られるばかり。また「越路の日記」は、美濃判和紙七十四枚綴の自筆本を所蔵、もと二冊あつたが一冊は先代が分与された。復刻本はない。銀山関係文書として、同家に残るものもあり、近く発刊の「飛騨鉱山史」に録される。

礼彦著書は　全三十四種、七十五巻の大部、うち上梓されたものに、斐太後風土記二十巻、飛騨国誌一巻、運材図会二巻、白梅園詩抄一巻がある。なお、富田家は、越前大野の出目家を祖とし、旧富田村に住し、大野城主金森長近の家臣となつて、飛騨攻略に従い、高山に土着したといわれる。

（筆者は前福井新聞学芸部長・）